

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 上野誠・鉄野昌弘・村田右富実編『万葉集の基礎知識』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也, Araki, Yuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000702

紹介

上野誠・鉄野昌弘・村田右富実編
『万葉集の基礎知識』

荒木優也

日本現存最古の歌集『万葉集』は現在に至っても更新され続けている文学作品である。ごく最近の例をいえば、元号「令和」の制定があげられる。もちろん、これは『万葉集』の（「うちがわ」ではなく、「そとがわ」の問題である。しかし、令和という時代に生きる我々は、もう『万葉集』を元号「令和」の典拠である文学作品としてしか読むことが出来なくなってしまったのであり、それ以前には戻れない。『万葉集』に限らず文学作品とは、作品そのものと作品の享受・影響とが一体となっており、人々に受け取られ読まれるものであり、その魅力は（「うちがわ」のみならず、「そとがわ」からも生じる。そして、『万葉集』はその成立から千年以上経った今でも、多くの人の心を捉えて離さず、更新され続けている。

さて、「令和」の典拠がマスコミによって広く世間に伝えられたことをきっかけに、『万葉集』関連書籍は玉石混淆ではあ

りながらも陸続と出版され、多くの一般読者を魅了した。ただし、もつと専門的に体系的に学びたいと思う読者を専門的な研究書へと架橋する書籍は少なかった。それに応えるために編まれたのが、今回紹介する『万葉集の基礎知識』である。

本書の魅力は、その書名にあるように「基礎知識」を知るに有益であるとともに、読み物としても面白いことにある。また、三人の編者のもと四十二人の第一線で活躍する研究者の分かち書きによって、研究レベルでの共通理解、そして矛盾も含めて一般読者に紹介する。次に目次をピックアップして示すことで、その全体を紹介しておきたい。

I 万葉集のうちがわ

一、歌のしわけとなりたち 二、歌びととその時代

三、歌のかたちとくふう 四、漢字と万葉集

五、万葉集を復元する

II 万葉集のそとがわ

一、万葉集の広がり 二、注釈書の歴史

三、新しい万葉研究の芽ぶき 四、万葉集とその時代

五、中国文学と万葉集

III 万葉集を味わう

IV 万葉集をよむための小事典

一、『万葉集』の基本

二、『万葉集』探求のためのキーワード

三、『万葉集』研究のためのキーワード

四、万葉歌人小事典

付録地図

参考文献

主要索引

その構成は、Ⅰ部「万葉集のうちがわ」、Ⅱ部「万葉集のそとがわ」とⅢ部以下の「万葉歌を味わう」「万葉集をよむための小事典」との大きく三つに分けられ、分量もほぼ三等分されている。Ⅰ部の「うちがわ」で触れられる内容は、全二十巻それぞれの内容、巻の成立の段階、歌人の変遷、レトリック、文法、写本などの、研究する上でおさえておかななくてはならない基礎ともいべき知識が多岐にわたり掲載され、それら各項目が簡潔にまとめられている。また、Ⅱ部の「そとがわ」では、『万葉集』の享受の歴史、解釈の歴史、また、研究方法の今日における広がりについて述べられる。本書あとがきにも書かれるように、「そとがわ」についてページ数をこれほどにさいた

入門書はまずもつてないだろう。ただし、この二つは完全に分かれているわけではない。たとえば、Ⅰ部「二、万葉集を復元する」とⅡ部「三、新しい万葉研究の芽ぶき」、Ⅰ部「四、漢字と万葉集」とⅡ部「五、中国文学と万葉集」とは、それぞれ内容に重なるところがあることに気づく。本書全体を読めば、実は「うちがわ」と「そとがわ」とが密接に関わっていることに自然と気づく仕掛けになっているのである。本書はどこから読んでも良いが、興味を持ったところを一通り読んだあとには、ぜひ通読して『万葉集』のダイナミズムを感じて貰いたい。

このように、ⅠⅡ部で読者の知識欲を刺激するわけだが、それだけではなく、歌自体を知りたい人には「Ⅲ万葉集を味わう」、さらに学びたいという人のためには「Ⅳ万葉集をよむための小事典」と「参考文献」の一覧が用意されている。詳細に紹介されている「参考文献」にあたれば、より深く『万葉集』を学ぶ道が開けることだろう。

全体を通して読むと、正直なところ難解な文章があることも否めない。学部一・二年生には難しいかもしれないが、ぜひ読んで貰いたい一書である。

(四六変形判、四五六頁、KADOKAWA、二〇二一年四月発行、定価二四〇〇円＋税)